

協生農法とは？

ソニーも農業に携わっています。新しい視点の農法

協生農法とは、ソニーコンピューターサイエンス研究所（ソニー-CSL）の船橋真俊さんが研究に取り組んでいる農法。「壊れゆく自然環境を立て直す」ことを根底に、「農」から新しい自立社会への改革が込められた壮大な取り組みです。昆虫からさまざまな植物、生態系本来の特性を総合的に活用し、自然環境をいかに、自然に委ねながら農作物を成長させる新しい考え方の農法。



「協生農法」は、わかりやすい文章で農法マニュアルが一般公開されています。ソニー-CSL サイト内 <https://www.sonycs.com/jp/tokyo/407/>

収穫した農作物はソニー×里山十帖の店 THE FARMにて提供

協生農法で収穫できた農産物は、不定期ではありますが、ソニー×里山十帖のコラボ店「THE FARM」にて、野菜メニューとして提供することもあります。たとえば、一年のなかでも長い期間穫れる「島らっきょ」。1粒1粒が小さいにも関わらず、野性味あるピリリとした力のある味、それでいて後味がすっきり！と好評。野菜以外にも、協生農法でとれた無農薬のお茶を使ったオリジナルドリンクも提供しています。

※ソニーの社員食堂で一般公開はしていません



季節の野菜でランチを提供中



まるで雑草地！ですが、畑です。収穫中の様子

攪拌した種は、ばらまく（写真左）。通常農業で行う「畝を作ったり」「筋蒔き」はしない。土地の空いている場所にまんべんなく蒔く。発芽してきた数週間後に追加で種まきをすると、種まきムラがカバーでき完璧！

いろんな作物が一緒に収穫できます



↑はっつ



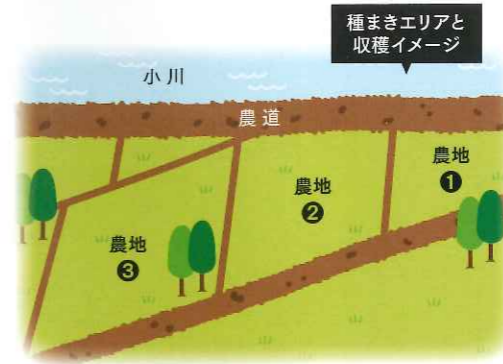
農地③ 笹×野菜の協生エリア 竹のパワーを活かす

上の写真の畑に所々緑の塊として点在するのは「笹」をあえて残す。その近くは、残存エネルギーが塩梅よくあるため上手に育ち、作物が多く収穫できる。笹の側には、パワー、多彩な食べ方ができる優れた食物「またたび」を植えた。種は下写真のように、様々な種を混ぜて蒔く。



全体を構築することを第一に考えている。農作物は生態系の一部分に過ぎないため、畑がどこまでかの境目は季節や植生に依り変わる。慣行農法では当たり前の、一列にレタスだけができていくというのではないのだ。人参、レタスなど様々な野菜たちが、好きなように好きな場所で育つてくるものを収穫する。種まきしたあとは、ある程度になるまでは水をやるぐらいで、農薬を散布したり肥料を与えたりもしない。その代わりに、非常に沢山の植物を密に組み合わせることで強い生態系を作る。将来、できた農産物は、ソニーと里山十帖のコラボ店「THE FARM」のメニューとして登場予定。本当に野菜はできるのか？ 今後の経過報告をお楽しみに。

今回の農地の全貌をイラストで解説。種まきエリアは、1〜3の農地で約1ha弱(3,025坪)の広さ。環境によりどんな生育の仕方をするのか？経過を観察するために、今回は、エリア(農地)に分けて様々な試みで植えてみた。



農地① 新規就農者を応援するため 果樹の苗木育成エリア

苗木から育つまでに3〜4年の時間がかかるため、ここである程度育てて苗木を再販する。日が当たること、風が吹かない場所が柑橘に適している。



▶野いちじ

▶ペリリ

▶レモン

農地② 果樹×野菜×水辺の協生エリア

山葡萄を移植予定。樹の下の草には、後で何を蒔いたかわかりやすい種を植えるのが良い。おすすめは「にんじん」「ラディッシュ」「小松菜」など。今回は10種を蒔いた。一部に水辺を作り適切な野菜を育成。



実践者のみなさん

右奥から 協生農法の師・大塚隆さん 農家の田中さん家族

今回種まきを指導してくれた、大塚先生。この耕作放棄地で収穫にチャレンジする田中さん家族。重機を使わず、軽作業のみの農法のため、高齢者でも楽に取り組めるという。

周辺環境を回復しながら 生態系全体を構築する農法

今回種まきをする畑は、長年にわたる耕作放棄のため、まるで原野。上の写真でもそもそも農園であることすらわかりにくいのが、これでも種をまくために、草を刈って見通しよくわかりやすくした状態。しかも、肥沃とは言えないような場所でも、普通では考えにくい小労力で、多彩な食べ物を収穫できる園地へと生まれ変わるという。世界的にも注目されはじめた「協生農法」という農法で、この農法の師・大塚隆さんの園地デザインのもと、田中さん家族が実践、放棄地再生の実験がスタート。協生農法とは、不耕起、無施肥、無農薬、種と苗以外持ち込まないという制約条件のなかで、植物の特性を活かして生態系を構築・制御し、生態最適の有用植物を生産する露地作物栽培法。与えられた環境条件で可能な範囲で、複数種が競合協生しながらそれぞれ最大限の成長を達成する状態を言う。慣行農法が、農作物を育てるために周辺環境のなかの部分である圃場だけを見て栽培していることに対して、協生農法は、その周辺の生態系